

今こそ、備えを強化する時⑧

昭和21年12月21日は、昭和南海地震が発生した日です。この地震は、過去に高知県を襲った地震、津波と比べると、地震の規模、被害共に小さかったといわれます。今回、過去に大きな爪痕を残した安政や宝永地震の記録をたどり、先人からの戒めとして残された碑文や言い伝えなどを現代風に訳して掲載いたします。

先人からの戒め

過去の南海地震を経験した先人たちが、後世に伝えようと残した碑や、昔から伝わる言い伝えなどから、どのように対処したのかを知り、今後の防災対策に役立てる。

(訳) 広報編集委員長 野村土佐夫
(絵) 広報編集委員 島村立法

※掲載した絵は、取材をもとに当時を再現したイメージ画です



▲夜須町の観音山へ逃げる群衆

夜須町

観音山の碑(安政南海地震)

去る嘉永七年の巨大津波の記録を付す
浦人の安全長久の為に記す

十二月四日(旧暦)の早朝に地震が起こり、大波が一日に七十八回も打ち寄せ、浦の人々はこの現象を怪しく思っていました。ところが翌日の五日は晴天のうえ夏のような暑さでした。夕方の午後四時ごろになって、天地がひっくり返るほどの大地震で、浦人の驚きは蚊柱の中にあるような騒ぎでした。

やがて夕日が沈むころ一番目の津波が打ち寄せ、西町あたりから東へ押し流し、人々は驚きながらも、食物や着物など手に提げ、この山へ持ち上がったことで数百人の命が助かりましたから、この山を浦人は命山と呼ぶようになりまし。二番目の津波は少し間をおいて打ち寄せるとき、浦が、「三百メートルも沖に引いていました。午後八時ごろ三番目の津波が狂ったように打ち寄せると、一瞬にして家や蔵を跡形もなく流し去り、その跡の景観は、あたかも白浜のよう目で目も当てられない惨状でありました。後世の人々への忠告として、天災が起きたときは、家財を惜しむあまり、わが家へ引き返すような行為は絶対しないように、くれぐれも忠告しておきます。このことが一番肝心なことです。

福重鉄次郎が記す。

命山

香我美町

飛鳥神社の懲恣(安政南海地震)

懲恣とは、懲りること。用心すること。

諺に油断大敵という格言がありますが、軽々しく安易に考えてはなりません。安政元年の十二月(旧暦)のことです。朝五時ごろ、大きな地震がして、岸本の浜では渚が二十メートルほど沖に引きました。また、手結の港では海水が引いてウナギが手つかみで捕れました。その日は二度ほど小さな地震がありましたが、人々はそれほど気にしていませんでした。ところが翌五日の八時すぎ大きな雷鳴が響き激震が三度も走りまわりました。これは大変だと浦人たちが驚き慌てるうちに、家も蔵も、また高棚に家具調度品が壊れる音が大きく聞こえてきました。逃げようとしても目がくらみ体が自由にならず、やつとの思いで家から這い出る有様でした。

津波は何度となく打ち寄せ、徳善町(月見山ふもと)から北の田園、赤岡の西浜や松の本、吉川の庄屋の門(松木百石)まで打ち寄せました。また、香宗川口からの津波は赤岡の御旅所(礼場の神輿休めの石)まで打ち寄せ、古川の堤と夜須の堤も決壊し、夜須の町家は半分以上流出しました。けれど人々は、老人をいたわり、幼児を抱きかかえ泣き叫びながら、徳王子や須留田または、平井山、大立寺(赤岡小学校の後ろ)山へ逃げ登り命拾いをしました。

この地震で、土佐藩の藩舎や民家が多く倒壊し、中でも高知城下と幡多中村などは火災で全焼し、怪我人や死人が何百人も出たのです。幸いにして岸本赤岡とも神様の加護により一人の怪我人も出さず、須留田や大立寺の山に小屋を造り住んでいましたが、日が経つに従って地震もようやく収まり、恵みある時勢の福音を喜び合ひ、それぞれ家に引き上げました。

この安政地震ですが、宝永四年の地震から百四十八年も経っていますが、このような周期で災害が起きるといえる人がいます。しかし天災の起きることは、人間が予告できるものではありません。だから、いつも天災に対する心構えが必要なのです。

人は、宝永地震を昔話のように話しますが、常に心の準備を怠らないようにすべきです。これらの天災を後世の人々は、この安政災害を昔話のように思わず油断しないように、これらの惨事を碑に刻み、飛鳥神社の加護によるものと後世に厳しく伝え、この地の人々の真心に接し、たまたま私(徳永千則)が高見奉行所へ出張中に、この災害に遭遇したことから、その状態を書き残し人々の問いかけに答えられるように記しておきますので宜しく。

安政五年初秋

徳永千則 文章
前田有稔 筆書
澤村寅次 彫刻

後世に厳しく伝え



▲「命山」と呼ばれた観音山。頂上からは夜須のまちが眺望できる。



観音寺地蔵台座碑



見聞記 夜須町西山

夜須の大西山に廃寺となった観音堂があります。(西山八幡宮の西300m) 参道へ入って左側に首のない地蔵尊が二十体ほど乱雑に置かれてありました。この中で一番大きくこけむした地蔵尊の台座に「安政元年十一月五日」の彫刻が読み取れました。そして「津波入殮」とあり、俗名は「常光」とありましたが、名は読み取れませんでした。安政の津波で亡くなった幼児の墓石だと思われま。

※明治初期に廃寺となった観音寺。首なし地蔵尊は、廃仏令で壊したのではないかと考えられる

飛鳥神社の懲恣 香我美町岸本

訪れた日はちょうど若一王子宮の秋の大祭が行われており、御旅所の飛鳥神社では、獅子舞の奉納が行われていました。



碑は神社の北の一角にあり、大字で「懲恣」と書かれています。

一碑を訪ねて

観音山の碑 夜須町坪井

夜須交差点から徒歩で約10分。観音山入り口付近は、避難路として道路や階段の拡幅工事が行われていました。約90段の階段を、整備された手摺りを頼りに登っていくと、頂上の広場にはお堂と碑がありました。また、広場の中央には、太陽電池式の街路灯が整備され、海拔27.9mと表示された看板が設置されています。

問い合わせ
防災対策課
☎ 57-8501